

艳艳の悲しい話は、黄土高原来信・第一部でも取り上げられていますのでお読みになった方は多数いらっしゃるかと思います。人類の文明の発展は、とどまる所を知らないように進んでいるこの21世紀、母親の無知のために命を落とした少女へ深い哀悼を込めて、黄土高原と呼ばれる中国辺境の農村の現実を伝えています。

厳しい生活環境もあって、女性の教育が軽視されがちなのですが、女性にも教育が必要であることを繰り返し述べ、艳艳の物語では無知の悲劇を紹介しています。



艳艳にはアンケートがありません。偶然に写した艶艶の写真、それも友達と一緒に、一枚の写真があるだけです。実際、艳艳は私のことを知りませんし、私もまた彼女についての印象は何もないのです。

2001年5月、私は又、伏羲河村を訪れましたが、もう夕方、しかも稟を剪定する季節でしたので村の中に大人の人影は殆どありません。私は子ども相手にふざけて、学校に行っている子ども見かけると「私のこと知っているでしょう？」などと声を掛けたりしていました。

ここには3、4回は来たことがあって自信もあったのです。案の定、遠くの方から走ってきた二人の女の子が指差しながら笑いかけてきました。私は元気になり2人に言いました。

「私のこと分かるでしょう？」

「分かるわよ」

予想通りの答えが返ってきましたので、嬉しくなり、

「写真を撮ってあげたことあるでしょう？」

私はいつも村の子供たちの写真を撮ってはあげています。それでこんな風に問いかけてみました。が、彼女達は

「ないわ！」

と頭を横に振りました。記憶の中で3人の女の子を一緒に撮影したことがありますので、写真を出して見比べ

「この子達は誰なの？」

と訊きますと、一人の女の子が、

「芳芳でしょう、慶慶でしょう、それに、艳艳！」

すると、もう一人の女の子が付け足しました。

「艳艳はいなくなったわ！」

「どうしてなくなったって言うの？」

わけが分からず重ねて訊きますと

「いなくなったっていうのは死んだって事よ」

「ネズミ捕りの薬を飲んで死んだんだよ」

「先月だよ」

二人は先を争っていいました。子供たちの話はとても理解できませんし、又信じられることでもありません。

夜になってオンドルの上に身体を横たえ思い出してみま

した。2000年の正月、私が伏羲河村にやって来た時、たまたま村の真ん中に人が群がっていました。老人達が日向ぼっこをしながらカルタを打っており、女の子たちが老人達の周りで小鳥のようにピーピー、チーチーと囁いて、しかも時折私にいたずらを仕掛けて来ます。私がカメラを彼女達に向けると小鳥が飛び立つように散らばるか、身体を翻してしまうのでどうしても撮影できません。どうしようもないのでカメラを別の方に向けるや、石臼の縁に焦点を合わせました。石臼に寄りかかり三人の大人しく内気な女の子たちが、町の子どもと同じような服を着、はにかんだ様子でこちらを見ていました。私はすぐさまシャッターを押しました……。

10月のある夕方、私はまた伏羲河村を訪れました。この日は曇っていて撮影にならないので子供たちがいる学校に行き、まだ帰宅していない子供たちに、「ちゃんと渡してね」と繰り返し頼んで、この三人の女の子の写真やその他の写真を預けたのでした。三人の内のどれが艳艳なのでしょうか？

2日目の朝、私は村に来ると、道すがら知り合いの村人に挨拶しながら、艳艳の家がどこか訊きました。傍にいた子どもがすぐ近くだといって私を家の前まで連れて行ってくれました。艳艳の家の薄暗い窑洞に入り、暫くしてやっと家の中の様子をはっきり見て取れました。貧しく、とり散らかったままで、壊れかけた竈の上に何個かの茶わんが置かれ、竈と繋がっているオンドルの上には色褪せた布団が積まれていました。破損したいくつかの家具に全ての財産が収められているのでしよう。

私は黒くなった壁に額が掛けられているのを見つけました。右下のコーナーにはやはりあの見慣れた三人の写真がありました。指し示してもらいやっと黄色い綿入れを着て左に立っている、丸顔で賢そうな女の子こそが艳艳だと知りました。

艳艳の母親は呆けたような顔つきで私に語ってくれました。その夜、艳艳は隣家でテレビを見て家に戻り、お腹が空いていたので、水がめの蓋に置かれてあった蒸し饅頭(小麦を捏ねて蒸しただけで餡は入っていない)を、深く考えず食べてしまったのです。しかも、それは母親が自らネズミ捕りの薬を混ぜ、水がめの蓋の周りに置いた四個の中の一個でした。母親は薬入りの饅頭を方形に並べ真ん中に人が食べる饅頭を置けばネズミに食べられないと思っていたのです。悲劇はこのようにして起こりました。



艳艳和庆庆、芳芳的合影。这是唯一的一张艳艳的照片。（左一为艳艳。）

艳艳にはアンケートがありません。偶然に写した艶艶の写真、それも友達と一緒に、一枚の写真があるだけです。実際、艳艳は私のことを知りませんし、私もまた彼女についての印象は何もないのです。

2001年5月、私は又、伏羲河村を訪れましたが、もう夕方、しかも稊を剪定する季節でしたので村の中に大人の人影は殆どありません。私は子ども相手にふざけて、学校に行っている子ども見かけると「私のこと知っているでしょう？」などと声を掛けたりしていました。

ここには3、4回は来たことがあって自信もあったのです。案の定、遠くの方から走ってきた二人の女の子が指差しながら笑いかけてきました。私は元気になり2人に言いました。

「私のこと分かるでしょう？」

「分かるわよ」

予想通りの答えが返ってきましたので、嬉しくなり、

「写真を撮ってあげたことあるでしょう？」

私はいつも村の子供たちの写真を撮ってはあげています。それでこんな風に問いかけてみました。が、彼女達は「ないわ！」

と頭を横に振りました。記憶の中で3人の女の子と一緒に撮影したことがありますので、写真を出して見比べ

「この子達は誰なの？」

と訊きますと、一人の女の子が、

「芳芳でしょう、慶慶でしょう、それに、艳艳！」

すると、もう一人の女の子が付け足しました。

「艳艳はいなくなったわ！」

「どうしてなくなったって言うの？」

わけが分からず重ねて訊きますと

「いなくなったっていうのは死んだって事よ」

「ネズミ捕りの薬を飲んで死んだんだよ」

「先月だよ」

二人は先を争っていいました。子供たちの話はとても理解できませんし、又信じられることでもありません。

夜になってオンドルの上に身体を横たえ思い出してみました。2000年の正月、私が伏羲河村にやって来た時、たまたま村の真ん中に人が群がっていました。老人達が日向ぼっこをしながらカルタを打っており、女の子たちが老人達の周りで小鳥のようにピーピー、チーチーと囁いて、しかも時折私にいたずらを仕掛けて来ます。私がカメラを彼女達に向けると小鳥が飛び立つように散らばるか、身体を翻してしまうのでどうしても撮影できません。どうしようもないのでカメラを別の方に向けや、石臼の縁に焦点を合わせました。石臼に寄りかかり三人の大人しく内気な女の子たちが、町の子どもと同じような服を着、はにかんだ様子でこちらを見ていました。私はすぐさまシャッターを押しました……。

10月のある夕方、私はまた伏羲河村を訪れました。この日は曇っていて撮影にならないので子供たちがいる学校に行き、まだ帰宅していない子供たちに、「ちゃんと渡してね」と繰り返し頼んで、この三人の女の子の写真やその他の写真を預けたのでした。三人の内のどれが艳艳なのでしょうか？

2日目の朝、私は村に来ると、道すがら知り合いの村人に挨拶しながら、艳艳の家がどこか訊きました。傍にいた子どもがすぐ近くだといって私を家の前まで連れて行ってくれました。艳艳の家の薄暗い窑洞に入り、暫くしてやっと家の中の様子がはっきり見て取れました。貧しく、とり散らかったままで、壊れかけた竈の上に何個かの茶わんが置かれ、竈と繋がっているオンドルの上には色褪せた布団が積まれています。破損したいくつかの家具に全ての財産が収められているのでしょう。

私は黒くなった壁に額が掛けられているのを見つけました。右下のコーナーにはやはりあの見慣れた三人の写真がありました。指し示してもらいやっと黄色い綿入れを着て左に立っている、丸顔で賢そうな女の子こそが艳艳だと知りしました。



新年前夕，艳艳的父母、弟弟能淡忘过去的伤心事吗？